おじさんズ通信

２０２３年９月号（Ｎｏ３４）
発行元：登別市新生町
桃柿通　緑風舎
発行者：おじさんズ３号

発行は毎月１５日頃。バックナンバーは「おじさんズ」のホームページでどうぞ

歴史道・Ⅲ　「鷲別村字トリエ」って、どこ？

本通信No31（６月号）で明治３年、幌別郡に入植した仙台藩片倉家の旧臣たちが追加支配地となった絵鞆半島の道路造りに取り組んだことを紹介しました。目指すは、のちに新室蘭港ができるトカリモイですが、はて、開削工事の幌別側の起点は？　元家老の日野愛憙が書き残した「片倉家北海道移住顛末」によると「鷲別村字トリエ國道ヨリ」＝右文＝と記されていますが、アイヌ語地名の大家、山田秀三氏や知里真志保博士の関係文書をあさっても「トリエ」なる地名が出てきません。

「そんなの、鷲別界隈のどこかだろう」とドウデモエエジャナイカ虫がささやく一方で、やはり、頭の隅にこびり付いたナゾ解き虫は退散しません。

そこで、地元の歴史やアイヌ語に詳しい方々にメールでお訊ねしたり、直接出向いて教えを乞うたり…。紆余曲折の末にやっと、たどり着きました、正解を知る人物に。

昭和９年の地名改定で消滅

登別市栄町１・２丁目周辺。右上斜めにJR室蘭線、中央に国道３６号が（Google Earth）

「『トリエ』は昭和９年の地名地番改正前の名称で、現在の『栄町』にあたります」

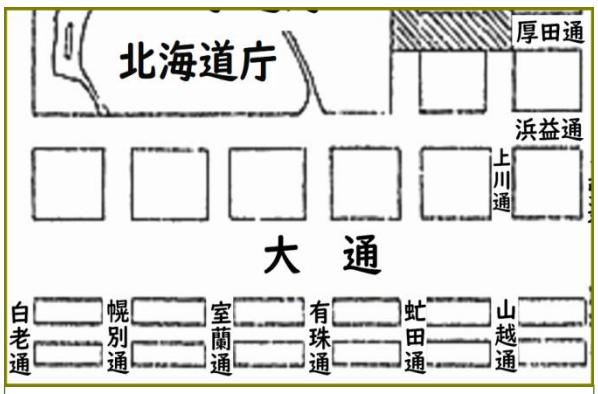
そう解説してくれるのは登別市職員のＳ氏。「新登別市史」（令和２年発刊）の編纂に携わった人物で、あいにく当時の新旧地名対照簿が残されていないため、室蘭の法務局まで出かけ調べたというから、間違いないでしょう。それにしても、Ｓ氏の調査力、行動力には驚くばかりで、参りました！

次に出てきたナゾが「トリエ」の意味ですが、これは？のままです。

登別の郷土史家、故・宮武紳一氏の著書「郷土史探訪・郷土史点描」によると、昭和９年まで鷲別町には字地名が「ハマ」「濱」「鷲別」「ワシベツ」などたくさんあり、例えばアイヌ語を冠した「字ドロカワツプ」は「ト・ロ・プツ（沼・その中・川口）＝泥川」が原名ではないか、と紹介されています。

およそ１５０年前、第二の故郷発展の礎（いしずえ）となるであろう道づくりのクワを入れた家臣たちの心情や、いかに。物語としての一歩も、踏み出したいものです。

歴史道・Ⅳ　サッポロに幌別通、室蘭通があった



明治８年の札幌本府周辺
（Wikipediaより一部分。文字修正しています）

札幌のマチにかつて「幌別通」「室蘭通」などの通り名があったことをご存じでしょうか。先に挙げた宮武紳一氏の「郷土史点描」でそれを知りました。

「『札幌本道』登別を通る　その５」で「開拓使は、全道からの道を札幌に通じさせる考えから、札幌の町通りに道内各地の国・郡名をつけていました。現在の大通りは後志通り、大通りに面する西２丁目は胆振通り、西６丁目は室蘭通り、西７丁目が幌別通りなど」（『通り』の表記は原文のまま）と伝えています。

Wikipediaの「札幌市内の通り」によると、通り名の数は３９。函館ー森ー（海路）ー室蘭ー札幌ルートの「札幌本道」開削工事開始１年前の明治４年に付けられたようですが、明治１４年の明治天皇巡幸の際に、「〇条〇丁目」の表記に改められたとのこと。

わずか１０年で消えてしまったとは、何とも残念。せめて、札幌にお出かけの際は、大通管理事務所を背に西７丁目通を眺めながら「うむ、あれが『幌別通』か」と、１世紀半前の街並みに思いを馳せるのも一興では。

散策すれば

確かに「ク～」っと

確かに「ク～」っと鳴いたのであります、エゾリス君が。

場所は旧洞爺村にある「財田（たからだ）キャンプ場」の湖畔沿いに敷かれた自然観察道。８月下旬の午後、足に優しい遊歩道を進んでいると、一匹のエゾリスに出会いました。まるで、私と隠れん坊するかのように、少し先を行っては木に登り、降りたかと思うとしっぽをシャンと立てて道を横断し、また木登りして枝を伝い歩きしたり、忙しい。

早速、手持ちのスマホで動画撮影しましたが、耳を澄ますと枝の上で「ク～」と幾度か、小さな鳴き声を発しているではありませんか。

これが、リスの鳴き声？　初めて耳にしたので自宅に戻ってからネットで調べてみると、「クオッ」「コッ」「ギャァー」など様々。その中に、キャンプ場で対面したエゾリス君に似た鳴き声もありました。

自宅から車で１時間ちょっとの、きれいに整備された豪華キャンプ場。途中の自然体験ハウスで聞くと環境省の施設とか。どおりで税、いや、贅（ぜい）を尽くしているわけだ。

****

1日4度の飯を食う

原発処理水の海洋放出で中国が日本からの海産物輸入を禁止し、北海道でもホタテ漁業への影響が出ているとのニュースを見て、反戦・平和を訴え続けたジャーナリスト、故・むのたけじ氏の「**一日に四度の飯を食え。そのうち、一度は活字の飯を**」という言葉を思い出しました。

太平洋戦争が終わると、戦意高揚に関与した責任をとり朝日新聞を退社。３年後、故郷の秋田県横手市で週刊新聞「たいまつ」を創刊し、農村や農業の未来、出稼ぎ問題、農民運動などを紙面で取り上げました。

「一日四度の～」は、今ほど情報化社会ではなかった戦後間もないころ、一例として農民たちに語った言葉だったと記憶しています。

ソ連の穀倉地帯が干ばつになる、あるいは大豊作になる。それが、ひいては日本の稲作、農業に必ず影響を及ぼす。だから、農民も新聞という飯を一日一度、ソシャクして自分たちの仕事や暮らしにどう影響するか、考えよう。そんな意味合いだった思います。

決して新聞人としての営業言葉でありません。そして、新聞にとどまらず「１日３０分でも活字にふれる習慣は、貴重な財産になる」とも説いています。

ふりかえって私自身の、最近の４番目メシ事情ですが、年金生活者たるフトコロ具合も省みず、また新刊本を買っちゃいました。

「白井聡　内田樹　新しい戦前」（朝日新書　本体８９０円）。

紙幅不足で内容の紹介は難しいですが、ひとつだけ、日本の食料自給率問題について。政府は日本の畑でとれた物＝自給産品＝３８％としているが、畑にまく種子や肥料、ビニールハウス用の灯油はどこから来るかを考えると、自給率は１０％に届かないという。農水省も重々、承知しているとか。「日本にはエネルギーや食糧、医薬品など戦略的備蓄がない」（内田氏）。戦争なんて、とても、とても。

カバーに書かれた「敵基地攻撃能力の虚像」「『脅威論』を煽るメディア」などの惹句が、食欲をそそります。

薫風　烈風

▶大手中古車販売会社の不正問題を契機に、「いびつな企業風土」を指摘する評論家が、該当しそうな企業の特徴を挙げていました。その一つが「役員専用のエレベーターがある会社」と聞いて思い出しました。

道内マスコミのシステム担当者会議での雑談。全国紙札幌支社の技術者が上京し、本社ビルに入ったが、エレベーターはどれも混雑状態。しかし、よ～く見渡すと人が並んでいない１基を発見！　運良し、と乗り込もうとしたら「ダメ、ダメ、これ社長専用だから」と追い払われたという。

もう２０年余り前の話なれど、あのＹ新聞本社のお偉方専用昇降機、まだ動いているのかね。

▶登別市立図書館ホームページの「おすすめ郷土資料」コーナーに９月１日をもって、宮武氏の「郷土史探訪・点描」全１７３編を掲載完了しました。テキスト打ち込みに要した期間は約半年でした。

掲載承諾をいただいた登別市内に住む宮武氏の三男さんにメールでお伝えしたところ、ねぎらいのお言葉とともに「『書き残さなければ、歴史は残らない』と父はよく言ってました」との返信あり。心に響く、ひとこと、励みになります。

▶「豊浦町だってホタテの産地なのに、なんで地元の反応を記事にしないの」と、今も元職場で働く後輩に LINE したが、今朝の紙面にも……。まあ、短気や立腹は短命の元か。それでは皆さん、お元気で～。